

日本比較文化学会中部支部
第 12 回支部大会
発表抄録

日時 令和 4 年 10 月 16 日(日)

会場 浜松学院大学 (Zoom 大会)

日本比較文化学会中部支部

日本比較文化学会 中部支部 第12回支部大会

I 大会日程 令和4(2022)年10月16日(日)

II 支部大会スケジュール 13:00~16:00(予定)

○13:00~ 開会の挨拶(中部支部長:白鳥 絢也)

○13:05~ 研究発表

○15:10~ 座談会「中部支部のこれから」

閉会の挨拶(中部支部副支部長:澤田 敬人)

教育課程の変遷を見つめる その2

－「教育再生実行会議」から「教育未来創造会議」へ－

白鳥 絢也（常葉大学）

「教育再生実行会議」の提言から「教育未来創造会議」の提言までを概観する。その中で、教育課程変遷の大きな流れを抑え、これからの教育の姿を捉え直していきたい。

○教育再生実行会議 ※R3.12.3 廃止

第一次提言「いじめの問題等への対応について」(H25.2.26)：いじめ防止対策推進法（平成25年法律第71号）、道徳教科化、体罰禁止、部活動指導ガイドラインの策定等。

第二次提言「教育委員会制度等の在り方について」(H25.4.15)：教育委員会制度の改革等。

第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」(H25.5.28)：大学と学校現場との連携強化、大学・学校現場・教育委員会との協働強化等。

第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(H25.10.31)：「達成度テスト」、高等学校教育と大学教育の連携強化、「高等学校基礎学力テスト」、「大学入学共通テスト」等。

第五次提言「今後の学制等の在り方について」(H26.7.3)：義務教育学校、幼稚園、保育所及び認定こども園における5歳児の「義務教育化」等。

第六次提言「「学び続ける」社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」(H27.3.4)：フリースクール等の学びの多様化、抜本的な不登校等への対策、コミュニティ・スクールの拡大等。

第七次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(H27.5.14)：アクティブ・ラーニングの推進、教師のキャリアステージに応じた育成指標等。

第八次提言「教育立国実現のための教育投資・教育財源の在り方について」(H27.7.8)：幼児教育の段階的無償化及び質の向上、高等学校教育段階における教育費負担軽減、高等教育段階における教育費負担軽減等。

第九次提言「全ての子供たちの能力を伸ばし可能性を開花させる教育へ」(H28.5.20)：子どもたち（発達障害、不登校、日本語能力が十分でない等）への教育機会の保障等。

第十次提言「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上」(H29.6.1)：幼児教育の段階的無償化、チーム学校、学校部活動改革、教師の働き方改革等。

第十一次提言「技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について」(R1.5.17)：Society5.0、高等学校普通科を「4タイプ」に、大学入試改革等。

第十二次提言「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について」(R3.6.3)：ニューノーマルにおける新たな学び、一人一台端末、教員免許更新制改革、遠隔・オンライン教育の推進等。

○教育未来創造会議 ※R3.12.3 発足

第一次提言「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について」(R4.5.10)：女性があらゆる分野で自ら持つ能力を發揮できる社会へ、誰もが家庭の経済事情に関わらず学べる環境整備、学び直し（リカレント教育）の促進等。

不満談話のストラテジー：ロコミに基づく分析 ー日本語とインドネシア語の比較ー

アンディニ・プトリ・プラタミ・ルスタンディ（金沢大学大学院）

これまでの研究は対話場面を想定した談話完成テストやロールプレイによって対照研究が行われてきた。しかし、非対話場面でも同様の結果となるかについては検証されていない。従来不満表明の研究で提案されてきた分析枠組みは、対面での双方向的なコミュニケーションに重視され、ロコミのような非対面的コミュニケーションに現れる不満談話のストラテジーに関しては見逃されたままである。そこで、本研究は日本語とインドネシア語のロコミデータをもとにして、日本語とインドネシア語の不満談話のストラテジーの異同を明らかにして、その要因を探る。

本研究の分析対象としたデータは、2015年から2020年までの期間に書き込まれたインドネシア語と日本語のロコミ各150件の合計300件である。研究方法として、まず談話全体を句レベルでセグメンテーションした後、アノテーションを行った。アノテーションについては8名の第三者によるアグリーメントチェックを受けた。そのあと、ストラテジーの使用頻度を量的に把握し、使用特性とその要因を質的に分析した。

その結果、インドネシア語話者よりも、日本語話者の方が不満談話のストラテジーを積極的に使用していることがわかった。クロス集計表を用いて、カイ二乗検定による独立性の検定を行った結果、p値の水準を <0.05 （有意差あり）とした場合、日本語、インドネシア語の不満談話において、感謝（54.46**）、相手（宿泊先）の責任追及（12.36**）のストラテジーはインドネシア語のほうに積極的に使用されたのに対して、相手の状況・行為の指摘（26.42**）、宿泊者の状況説明（85.95**）、と理解の表明（13.98*）のストラテジーは有意差が最も高く、日本語の不満談話のほう多く出現した。日本語とインドネシア語で、同頻度で使用されたのは書き手（宿泊者）の責任承認、条件、謝罪、再検討、拒絶、助言、肯定的評価、宿泊者の状況説明と皮肉のストラテジーであった。また、不満談話のストラテジーの使用に伴い、言語的特性がみられた。日本語とインドネシアの共通点・相違点があった理由はロコミのメディア特性や、言語文化背景の違いとポライトネスストラテジーに関わっていることが明らかになった。

本研究は日本語の不満談話の対照研究で扱われることのなかったインドネシア語と対照したことにより、不満談話ストラテジー特性の新たな知見を提供したと思われる。

日本におけるワシーリー・エロシェンコ

野田 晃生（河北外国語学院大学）

本発表においては、ロシアの詩人であるワシーリー・エロシェンコについて論じる。エロシェンコは、母国であるロシアの他、日本や中国、イギリス、インドといった様々な国に在住し、活動を行った。本発表では、日本における彼の活動を中心にみることによって、彼の業績を検討したい。

エロシェンコは、来日後、東京盲学校（現在の筑波大学附属視覚特別支援学校）に籍を置き、そこで学問を修めた。また、その際、これまでに自らが身につけた言語であるエスペラント語を広めた。

また、エロシェンコは、日本の視覚障がい教育においても、大きな業績を残した。東京盲学校に在籍した彼は、とても熱心に学問を修めた。

また、エロシェンコが日本において交流をもった人物達に、大杉栄、相馬黒光、秋田雨雀、神近市子らがあげられる。これらの人々との出会いは、エロシェンコの文学、思想を大きく成長させることとなった。

彼は、日本において、日本語を用いて多くの作品を発表した。その作品からは、彼の人類愛が読み取ることができる作品が多い。その頃にエロシェンコが発表した作品は、後に高杉一郎によって、『エロシェンコ全集』として世に出ている。

エロシェンコは、生涯において二回来日している。一回目は、1914年から、二回目は1919年であった。

一回目の来日の際、エロシェンコは東京盲学校で学んだ。その際、学んだのは、エロシェンコが希望していた按摩・マッサージ技術であった。その際、彼は、日本人学生達にエスペラント語を広めた。

本発表において見るように、エロシェンコは日本において充実した日々を過ごしていたが、それが終わる時がきた。エロシェンコが日本に滞在していた当時、日本においては社会主義に対する逆風があった。赤旗事件や大逆事件などが、その代表的な事件として考えられる。

二回目に来日した際、エロシェンコは日本国内において社会主義者の会合に出席したという嫌疑において、日本から追放されることになった。

エロシェンコにとって、日本は、祖国であるロシア以上に親しみを感じる国になっていた。その日本から、彼は追放されることになってしまった。彼は、その後、日本に戻ることはなかった。

エロシェンコは、日本を追放された後、中国に渡った。中国においては、中国人作家魯迅の招きによって北京大学にエスペラント語の教師として就任し、教育活動を行った。その時期の彼の活動においては、他発表において論じたい。

浜松市の中心市街地の空洞化への学生 NPO 法人の取り組み —アクト通りふれあいディから

津村 公博（浜松学院大学）・田島 喜代美（浜松学院大学）

1. 背景

(1) 浜松市中心市街地の空洞化

- ・ 高度成長期(1955 年頃から 1973 年頃)に大型店舗が全国展開
- ・ バブル期(1980 年代の後半～1990 年代のはじめ)に需要創出の名目により道路建設・拡幅・延伸し自動車社会の形成
- ・ 2000 年に入り、郊外型の大型小売店の進出

(2) 浜松市中心市街地の空洞化に対する浜松市の施策

「浜松市内中心市街地活性化基本計画(平成 27 年 1 月～令和 2 年 3 月)」

「令和 2 年度以降の浜松市中心市街地活性化の方針について」

2. 目的

「アクト通りふれあいディ」¹の運営に関わる NPO 法人わたぼうしランドデザインの取り組みを通して、地域の大学生による中心市街地のまちづくりを報告する。

3. 方法

NPO 法人わたぼうしランドデザイン及び浜松市産業振興課への聞き取り調査

4. 結果と考察

大学生の中心市街地のまちづくりに関する意識の変化

浜松市の大学生が運営に参加する「アクト通りふれあいディ」への成果と課題

¹ 地域住民の交流を促進し、アクト通りや中心市街地のにぎわいを創出することを目的として、平成 26 年 12 月に開催。令和 2 年 3 月(第 64 回)を最後に一時休止。令和 2 年 9 月、大学生の要望により、再開し第 90 回の開催を迎える。毎月 1 回開催

「アーカイバル・ヘゲモニー」再考

樋口 謙一郎（相山女学園大学）

発表者は、日本比較文化学会中部支部平成 28 年度例会における発表「いわゆる『アーカイバル・ヘゲモニー』について」において、「公文書は基本的に政府の記録であり、客観的で信頼性が高い。十分な公文書があれば、[...] かなりの程度、歴史を再現することは可能」（細谷 2017）といった認識に関連して、歴史叙述における過度の公文書依存に対する注意の必要性を論じた。本発表では、その後に発表者が得た知見や、各界の動向をもとに、さらなる討議を行う。

第 1 に、森友学園問題につき、公文書管理の観点から検討する。これは、学校法人森友学園（大阪市）が、2016 年 6 月に大阪府豊中市の国有地を小学校用地として購入したことに関する一連の問題である。この問題をめぐり、2018 年 3 月、財務省が売買契約に関する決裁文書 14 件に改竄があったことを認め、さらにその発表後に、土地売却を管轄する近畿財務局に勤務し、上司から命じられて公文書の改竄に関与した職員が自殺した。

第 2 に、第二次世界大戦中に旧日本陸軍によって建設・運行された「泰緬鉄道」の研究について考察する。吉川（1994）は「いままでの文献ではそれぞれが断片的に語られていても、全容を理解できる内容のものはなかった。結局、関係者が語る異常な体験談と回想録がほとんどであった。それだけに、タイ側で日本軍の動静を客観的かつ子細に観察し、克明に記録していた文書の存在には、あらためて驚嘆し、空白を埋める貴重な歴史資料として価値の高さを知った」と述べる。「敗戦直後、日本軍が後難を恐れて当時の関係文書を日本でも現地でもすべて焼却してしまい、保存されていない」という状況下で、日本と同盟関係にあったタイの国立公文書館には日本語の史料が残されている。

これらを事例として、いわゆる「アーカイバル・ヘゲモニー」の学術的な側面における問題点について前回に引き続き述べ、公文書研究の課題を論じたい。

参考文献

吉川利治（1994）『泰緬鉄道：機密文書が明かすアジア太平洋戦争』同文館出版（再販：雄山閣、2011 年）

細谷雄一（2017）「公文書がいざなう歴史への旅、未来への思考」（座談会）、『東京人』2017 年 4 月号、20-25 頁

○座談会「中部支部のこれから」
15:10～ ※終了後、解散

中部支部会員みなさんから、自由な情報提供、情報交換の時間を設けたいと思います。

その中で、「令和6年5月の全国大会」（会場、テーマ等）や「学会誌『比較文化研究』」について話題に挙げられたらと思います。

みなさまのご参加をお待ちいたしております。